

「私の人生を変えたあの一言」 〈最優秀作品(東井義雄賞)5編を紹介〉

親切のグルグルまわし



鈴木 彩霞さん
静岡県御殿場市・10歳

〈こぼを受けたときの状況〉

クラスで、なか間はずれをされた時、すごく悲しくて先生に相談をしました。先生が帰りの時間にクラスのみんなに「親切にするとわすれたところにまた親切がもどってくるよ。いじわるをするとわすれたところに自分にいじわるがもどって来る」と話してくれました。

「こういうのは、親切、いじわるのグルグルまわしと言うんだよ」と教えてくれました。先生は、話しの中で先生も親切をした時に10年してから親切がもどってきたことを話してくれました。いやなことを言われるといじわるをしてしまいたくなるけど、いやなことを言ったりしたりしないようにしようと思います。いじわるをされてもこの言葉の話をしてくれたのでがんばる力ががまんする力がわいてきました。それからクラスのいじわるやなか間はずれなどがなくなってきたなと思います。



「優しくしてくれてありがとう」
って言うたらいいんや



古久保 節子さん
和歌山県田辺市・62歳

〈こぼを受けたときの状況〉

二人の息子和私を残し、転移性のガンで逝った主人の最期のスイッチをどんな気持ちで押したらいいのかわからその事を考えながら泣き明かしていた時の事です。『なんて言って押しただいいん?』『さようなら』って言うん?『焼いてしまふのぐめん』って言うん?絶対お母さん押すことできない。すると二人の息子和が声を揃えて言うのです。「何言ってるん、おおきに、優しくしてくれてありがとう。って言って押しただいいんや」。その二人の顔を見て「はっ」とし「そうや、ありがとうや」。そう思うと、今までの恐怖感やその瞬間を考えると気が遠くなる心が、なぜかすごく落ち着きました。

そしてその瞬間がついにやってきました。スイッチに指を置くと、何と私の指の上に二人の息子和が指を重ね「お父さん、優しくしてくれてありがとう」と声を揃えて言うてくれたのです。言いしれぬ悲しみの中で息子和たちに教えてもらった背筋を伸ばした言葉でした。

ゆつくり歩くと
まわりの景色が見えてくる



仁平井 麻衣さん
東京都杉並区・17歳

〈こぼを受けたときの状況〉

小学校最後の運動会で紅白リレーのアンカーに選ばれて私は有頂天になっていた。それが自転車の思わぬ事故で足首を骨折し運動会どころではなくなりました。

入院先でギブス姿で、いらいらし、落ち込んでいた私に祖父が自筆の色紙を置いていった。何気なく声に出して読んでいたら、奇妙に心が落ち着いてきた覚えがある。気づくと病室の窓から見える秋の雲は、ゆつたり流れていた。その晩からぐっすり眠れるようになったから不思議だった。

祖父の色紙は私にとって魔法の言葉になった。高校受験の時も平常心で臨めたのも、ゆとりの訓しのお陰とされている。これからの人生で心の指針にしたい。





いのちの教育を探求し続けた日本を代表する教育者・東井義雄さん(但東町出身)を顕彰するために創設した東井義雄賞「いのちのことば」。その入賞作品発表会を、3月10日、但東市民センターで開催しました。

第4回目となる今回のテーマは「私の人生を変えたあの一言」。当日は、全国から寄せられた622編の作品の中から、最優秀作品の東井義雄賞5編を含む入賞作品100編を発表し、対象者に賞状や記念品などを贈りました。

なお、入賞作品については、書籍にまとめ、市内の図書館などに配置するとともに、希望の方に1冊600円で販売しています。

《問合せ》教育委員会但東分室

立派な設備、腕の確かな医師が揃っている病院であっても、最後は患者さんの「生きたい」という意志の力で



岩井 澄夫さん
東京都港区・62歳

《こぼれを受けたときの状況》

26歳の時、交通事故で内臓破裂という生死をさまよう大手術を受け、どうにか一命は取り留めることができました。入院したのは、救急病院であったため、十分な設備、スタッフは揃っていませんでした。しかも夜間でもあり状況は良くありませんでした。しかし、病院の最善を尽くしたご努力のお陰で危険を脱し、3カ月後に退院することができました。その折、執刀していただいた医師から「患者さんの生きたいという強い意志があつて、医師は十分に力が発揮できるのです。あなたには、それがあつたんです」。心も身体もボロボロになつている時、こう言われた医師のお言葉は、失つていた生きる自信が少しずつ戻ってくるような気になつたのです。それから結婚し、子供も今は自分の道を歩いております。この間のさまざまな出来事を超えていく力の源は、生きる力がぼくにはあると教えてくださった医師のお言葉なのです。

赤ん坊が笑ってくれるような、そんな笑顔で毎日過ごしたい。



細江 隆一さん
岐阜県八百津町・38歳

《こぼれを受けたときの状況》

知り合いの先生に言われた言葉である。教師が仏頂面していると、生徒も近寄りがたい。「教師はいつも笑顔で居るべきである」が特論の先生だったから、そんな言葉を私に贈ってくれたのだろう。

ポイントは「赤ん坊が笑ってくれるような」というところだと思う。赤ん坊は見せかけの笑顔では笑ってくれない。本心から笑わないと笑ってくれない。それは、相手を幸せにする笑顔でもある。赤ん坊は素直だから幸せな笑顔にしか反応しないからである。

とは言つても、仕事がハードだといふ仏頂面になつてしまいがちな私。この言葉はいつも壁に貼り、思い出したとき眺めては自分を戒めている。

それにしても、常に笑顔でいるってこんな辛いことなのか。反省…。



入賞作品発表会「基調講演」
「運命の言葉」(要旨抜粋)



〈作家〉
森村 誠一さん

「人間は一人では生活できない。社会で生きていかなければならない。それには言葉というものを知らなければならぬ。言葉はこの世の中を生きていく武器になる。だから言葉を磨き、その言葉を理解するためのアンテナを常に立てておきなさい」

これは、私が小学校の時に先生が語りかけてくれた言葉です。この言葉は私にとっての「いのちのことば」で、今でも心に深く刻まれています。

人生にはいろいろな節目があります。それを通り抜ける鍵は、得てして自分ではなく他人からさりげなく与えられます。豊岡市が企画する「いのちのことば」は、まさに、人生のさまざまな場面を開くことができる鍵の集大成といえます。しかし、それを読み解く力がないとそれは単なる言葉の羅列に過ぎません。今後も、全国から寄せられる「いのちのことば」が皆さんの人生について語りかけるでしょう。